

一粒万倍の機能をもつ、 教育・福祉資源としての大都市ど真んなか酪農

—そのとき牧場が教室になる—

東京都練馬区

小泉牧場とその仲間たち

(代表：小泉 勝)

1 地域の概況

東京都練馬区は、昭和22年に板橋区から独立して以来60年、みどり豊かな住宅都市として発展を続けてきた。産業は、非製造業の中小企業を中心とした産業構造となっており、景況感は決して良くないというのが現在の姿である。区では、地域経済を活性化させるため、事業者の活動支援や行政サービスの民間開放、都市農業の利点を生かした地産地消の取り組みなどを行ってきた。

(1) 23区随一の農地を有している練馬区

都市化が進む中で後継者難や相続などを契機として農地が切り売りされ、年々農地と農家人口が減り続けている。また、平成3年4月に「生産緑地法」が改正され「保全する農地」と「宅地化する農地」に分けられ、「宅地化する農地」の市街化が進んでいる。

区内の農業はキャベツの市場出荷を中心として行われてきたが、近年では農産物の市場価格の低迷、消費者ニーズの多様化や安全・安心志向の高まりを受け、多品目の農産物を減農薬で生産し、区内の直売所などで販売する地産地消の取り組みを進めている。また、身近に消費者がいる都市農業の利点を活用するため、観光・交流型の農業を推進している。

一方、区内の農地は相続などに伴い最近10年間で約100haも減少しており、環境保全・防災・農とのふれあいの場でもある貴重な農地を保全することが求められている。このため区は、他の自治体と連携し都市農地保全の意義を住民に発信するとともに、農地にかかわる法制度の見直しを国に要望する取り組みを進めている。

練馬区では農業振興計画を策定し、同計画では①都市にある農地の機能や役割を見直し、豊かな地域社会を築く農業の推進、②地元で取れた農産物を地元で消費する「地産地消」の推進、③環境に配慮した有機・減農薬農業の推進、④農業をしたい人と農家を結ぶ観光・交流型農業の推進を基本的な考え方としている。

(2) 農とのふれあいの推進

- ① 区民農園：区民が土に親しみながら、収穫の喜びを味わえるように、区が土地所有者から宅地化農地を借用し、区民農園を開設している（平成20年3月現在、23園、2,188区画）。
- ② 市民農園：健康でゆとりある区民生活に資するとともに、良好な都市環境の形成と農地の保全を図ることを目的として、区が土地所有者から生産緑地を借用し、市民農園を開設している（平成20年3月現在、6園、294区画）。
- ③ 農業体験農園：農業体験農園は、区が開設し管理する区民農園・市民農園とは異なり、農家が自ら開設し、経営・管理する農園で、区は園主に対し助言などを行うほか、施設整備費・管理運営費の一部を助成している。（平成20年3月現在、13園、1,427区画）
- ④ ふれあい農業推進事業：区民が新鮮な農産物を自ら収穫するなど、生産者とのふれあいを通して都市農業についての理解を深められることを目的として、野菜ウォークラリー、酪農体験、ふれあい農園の各事業を行っている。

2 地域畜産振興活動の内容

(1) 地域畜産振興につながる活動・取り組みの具体的な内容

活動の年次別推移

年次	活動の内容等	成果	課題・問題点等
昭和10年 昭和56年 平成元年	小泉 藤八氏が牧場を開業 小泉 與七氏が経営継承 学芸大学附属大泉小学校の生徒の見学を受け入れ	経産牛 20頭 経産牛 45頭（酪農専業）	
平成5年	練馬区立大泉小学校の情緒障害学級の生徒の見学を受け入れ		
平成12年	社会適応訓練事業の受け入れ農場として、精神疾患患者の受け入れを行う	受入数 約20人	
平成13年	同小学校3年生の総合学習の受け入れを開始（以後毎年）		
平成14年	同小学校の教師研修受け入れ開始（以後毎年）		
平成15年	中央酪農会議の酪農教育ファーム認定		
平成16年	・アイスクリーム販売開始 ・練馬区主催の酪農体験学習会の受け入れを開始		
平成17年 平成20年 平成21年	障害者委託訓練事業	年間受入数 延べ8,244人 経産牛 22頭、育成牛 15頭	育成牛を増やすため経産牛頭数が少なくなっている。

1) 都市型酪農ながら、しっかりとした生産・経営基盤を確立

約 70 万人が暮らす東京都練馬区の住宅街のど真ん中に「小泉牧場」はある。

経営主は父の與七（よしち）さんだが、現在、搾乳をはじめとした飼養管理全般は後継者である長男の勝（まさる）さんが行っている。そのほか、勝さんは東京都の福祉事業の一環として障害者を受け入れており、與七さんをサポートしながら労働力の一翼を担っている。

①酪農専門経営の小泉牧場

大都市の中央に位置する酪農で、オープンファームとして自由見学、体験学習、交流会などの場を広く提供していると聞くと、ほとんどの人は真っ先に観光牧場の姿を思い浮かべるだろう。しかし、この牧場は「酪農専門経営」をこの地で維持・発展させてきたのである。

飼養牛（経産牛・育成牛）、飼養管理技術、生産技術は、規模こそ違うものの酪農先進地である北海道酪農と比べても遜色ないものである。

②経営規模と生乳生産量

平成 20 年度の飼養頭数は約 40 頭、うち経産牛は約 30 頭で、年間生乳生産量は 270 t、経産牛 1 頭当たりの平均乳量は 9300kg（乳検成績）と高水準である。

平成 21 年 8 月現在、経産牛 22 頭、育成牛 15 頭を飼養し、ちょうど経産牛の更新時期にあたり育成牛頭数が若干多いが、順次、分娩を待って経産牛 30 頭規模へと拡大を進めている。本州では育成（更新）牛を購入に頼っている酪農経営が多いなかにあつて、ここでは自家育成による更新を行い、全頭牛群検定を実施するなど、酪農に対する経営管理、飼養管理・生産技術、先見性と三拍子揃った経営である。

出荷した生乳は、東京・多摩地域を主とした酪農家より集乳して作られる「東京牛乳」ブランドに提供しているほか、一部は加工用として、都内の酪農家仲間に加工委託し、牧場直売アイスクリームとして 1 個 300 円で販売している。練馬区観光協会が練馬区にちなんだ商品を選ぶ「ねりコレ」に選ばれるなど、地元の名物となっているほか、地域の学校給食に提供し、牛乳・乳製品の消費拡大にも寄与している。

なお、ふん尿処理に関しては、東京都の許可を受けて下水道で処理している。

③本物の酪農経営があつてこそ、感動を与えることができる。

小泉牧場のオープンファーム（自由見学）、体験学習、交流会などへのポリシーは、「自分たちの酪農経営そのものをすべて見せる」というもので、見学者などのために毎日の作業スタイルを変えることは行っていない。日々淡々と、経営者が自ら、真剣に酪農に取り組んでいる姿をみせることこそが最高の「先生」なのである。それを実践しているのが小泉牧場である。

2) 大泉小学校の畜産体験授業としての取り組み

小泉牧場にはよく子どもたちが訪れる。それはこの地域の子どもたちが小学校の授業でこの牧場のことを勉強し、実際に牛の世話も体験しているからである。

さらに、学校の授業が終わった後に自分から牧場を訪れる小学生もたくさんおり、小学生の子どもたちだけでなく多くの地域の人たちもこの牧場を訪れ、牛とふれあい、

畜産体験などを行っている。このように多くの人々が訪れる小泉牧場は、地域のシンボルというべき存在になっている。

①小泉牧場と大泉小学校の子どもたちとの交流のはじまり

平成13年度から、大泉小学校の子どもが3年生の総合的な学習の時間として、年間を通じて、牧場を第2の教室として学びの場としている。

教員は、もちろん酪農の体験はなく、牧場も大勢の子どもを長期に受け入れるのは初めてで、両方の側で、最初は不安やとまどいがあった。しかし、牧場に訪れることで、子どもが変容していく姿がみられ、そのことが大きな励みになって継続していくことになった。

②総合学習のはじまりは親子仕事見学会

小泉牧場は、観光牧場ではなく生乳生産の場であることを理解するために、夕方の仕事見学会を行っている。真剣に搾乳や掃除をしている酪農家の姿を親子で見学することは、大きな意味のあるものである。

今まで地域に住んでいながら、牧場に入ることもなかった保護者が、仕事見学会で、牧場に興味をもち、子どもたちの学習を支えていくことになった。子どもたちは、成牛や子牛、搾られる乳はもちろん、働く姿そのものに引きつけられ、学習意欲をもち、「やってみたいこと」「知りたいこと」がたくさんあふれてくるのである。



③さまざまな体験～学習発表会「小泉牧場ふしぎ大発見！」

その年々の子どもの興味によって多少のちがいはあるが「やってみたいこと」として、搾乳体験や写生大会、バター作りなどを全員で体験し、「知りたいこと」は、テーマごとにグループで小泉親子にインタビューして学習をすすめていった。

中には、「ふんかきをしてみたい」という子どもたちがいて、小泉氏も驚き、不安に思ったが、子どもたちは、喜々として働いていて驚かされる。ふんかきという仕事を通じて、小泉氏が掃除に力を入れているわけ、動物の動きに合わせて仕事をしていることなどを学んでいくことができた。



そして、大泉小学校では、2月28日、3年生による学習発表会、「小泉牧場ふしぎ大発見！」が行われた。この取り組みは、1年間牧場に通った子どもたちが、体験してきたことや、調べてきたことをまとめ、発表したものである。

発表会では、牛の出産や牛の一生、牧場の仕事など、自ら決めた12のテーマで調べ学習した内容を、劇やクイズ形式など工夫をこらして発表した。

中には、牛が反すうする様子を再現したり、1日に牛が何回ふんをするのかをクイズにしたり、小学生ならではのユニークな視点の発表もあった。

発表会の最後には、小泉氏への感謝の言葉として、「最初はこわかった牛が、今ではかわいいと思うようになった」、「牛乳を残さず飲めるようになった」、「ミルクをあげるときに子牛のお母さんになった気持ちになった」、「これからも牧場を続けてほしい」というメッセージが贈られ、小泉氏は「これだから酪農はやめられない」と目頭を熱くしていた。



この発表会は、小泉親子を招待するだけでなく、保護者や地域の人も招待する。2年生や4年生も見る。児童らの学習の成果を目の当たりして、保護者は、小泉牧場への感謝の気持ちを強くもつのであった。

④社会科での学習「なぜ小泉牧場は23区内唯一残ったのか」

社会の「まちの人のしごと」で牧場をとりあげた時は、小泉さんの1日の仕事や牛乳の流通について学んだ。また、練馬区にも45年前には36軒もあった牧場がどうしてなくなってしまったのか、そのわけを考えた。



そして、與七さんを学校に招き、地域が宅地化していくなかで、においや牛の鳴き声などの苦情が増えるようになり、酪農経営を続けることが難しくなったこと、コーヒー粕をまいて臭い消しをして、掃除を一生懸命し、牧場が地域に残れるようにがんばったことなど、自らの体験を語ってもらった。また、與七さんは自分の曲がった指を見せて、手搾りのころの話をした。

⑤教員のための研修会

こうして小泉牧場での学習は、大泉小学校の特色ある教育活動に位置づけられるようになった。「3年生になったら牧場たんけんができる。」と、楽しみにしている親子も多い。しかし、毎年教員の入れ替わりもある。担当が牧場を理解していないと、学習も進められず、牧場にも大きな負担となる可能性がある。



そこで、平成14年度から、毎年夏期休業を利用して、牧場理解を目的にした教員のために、研修会としての畜産体験を数回設定している。この研修会には、教員、栄養士、給食主事などすべての職員が参加し、與七さんと勝さんが「先生」になって、ふんかきから搾乳、えさやりなどを体験させている。

⑥牧場応援団（チームミルクル）一手伝いを続ける小中学生



3年生で学習した児童の中に、4年生になっても牧場に行きたい、子牛を育てたいという子どもがいた。秋の出産シーズンに双子の子牛が産まれたことをきっかけに牧場近くの子どもたちが集まって、1ヵ月半にわたって、毎日夕方の哺乳を手伝った。

兄弟の中学生も小学校の時の経験を思い出し、一緒に参加した。勝氏が仕事をする姿を間近で見ながら、たくさんのことを学んでいる。

現在では月に1回8人の小中学生が放課後に集まり、「チームミルク」 という名のもと手伝いを続けている。

3) 酪農体験学習会（主催：練馬区）の開催

23区内に唯一残る小泉牧場での体験を通して、酪農に対する理解を深めてもらうことにより都市農業の振興を図ることを目的に、小泉牧場の協力のもと練馬区が主催する事業で、練馬区民を対象に平成16年度から年に1回実施している（平成16年度のみ年2回実施）。

毎年、定員90人に対し、1.5～2倍近い数の応募があり、都市部で酪農を体験できる貴重な事業であり、区民の関心も高い。

酪農体験では、都市部で酪農を行うための工夫や、観光牧場ではなく「牧場は仕事の間、(牛乳の)生産現場、(牛の)命を生産する場」ということを参加者に伝えるなど、酪農への理解を通じた都市農業の振興にも大きな役割を果たしている。

4) 福祉施設としての役割

①東京都精神障害者社会適応訓練事業（平成12年～）

平成12年から、東京都の精神障害者社会適応訓練事業の受け入れ農場として、うつ病などの患者の受け入れを開始。受け入れ患者の年齢構成は18歳から50歳代まで幅広く、現在まで約20人の受け入れを行っている。労働内容は搾乳以外の一般作業で、労働時間は月・火・金・土の週4日、午前11時から午後4時までの5時間である。

②障害者委託訓練事業（平成17年～）

平成17年から、(財)東京しごと財団の障害者委託訓練事業の事業所として、知的障害者の受け入れを開始。労働内容・時間は①と同様で、これまで延べ11人の受け入れを実施している。

5) 視察および研修会等の延べ員数（平成20年実績）

区分	員数	備考
自由見学（オープンファーム）	6,000人	20人/日×300日
練馬区立大泉小学校	1,400人	70人/回×20回
練馬区立大泉第3小学校	200人	100人/回×2回

練馬区立大泉学園小学校	160人	80人/回×2回
練馬区立光が丘第八小学校	80人	80人/回×1回
新宿区立花園小学校	140人	70人/回×2回(1～2年生)
練馬区立大泉東小学校	180人	90人/回×2回(3クラス)
東京都立大塚ろう学校	30人	30人/回×1回
新宿区立養護学校	25人	25人/回×1回
日本獣医生命科学大学(実習体験)	21人	1人×21日
社会適応訓練事業	4人	東京都
障害者委託訓練事業	4人	(財)東京しごと財団
計	8,244人	

※保育園および幼稚園の見学等は、自由見学に含めている。

(2) 活動の背景

1) 「くさい」、「汚い」、「うるさい」と公害扱いを受ける

今では、子どもから大人まで多くの人を訪れ、牛乳の生産の場としてだけでなく、酪農体験、「食べ物」や「命」の教育の場としても親しまれ、地域のシンボリック的存在となっている小泉牧場だが、しかし、ここまで地域の人たちに受け入れられるまでには、多くの苦労があった。

その苦労とは、牧場周辺が、経済成長とともにベットタウン化し、20数件あった区内の酪農家が次第に減っていき、地域の人たちから、だんだんと牧場経営について理解してもらえなくなった。

そのため「くさい」、「汚い」、「うるさい」など、まるで公害のように扱われ、悩んだ時期があった。「においがする、牛の鳴き声がうるさい」などという苦情が相次ぐようになり、牛舎に中傷のビラを張られるなどの嫌がらせがエスカレートした。

この付近はアパートが多いこともあり、住民の入れ替わりが激しく、地域の理解を得ることが難しかったのが原因の一つで、「いつ経営を中止しようかと考えていたが、多額の相続税を考えるとやめるにやめられなかった」というのが本音であると與七さんはいう。

2) 牧場の見学や体験学習の場を提供

牧場経営を公害あつかいされて悩んでいたちょうどそのころ、学芸大学附属小学校の5年生の担任、梶井貢さんが社会科の教材として取り上げたいと牧場を訪れた。與七さんは、「子どもたちの夢をこわすのでは」と断ったが、数回にわたる熱心な説得に後押しされ、社会科の学習に協力した。子どもたちは、酪農について充実した学習をすることができ、牧場としても、一つのハードルを超えることになった。

そして、平成13年度。総合的な学習の時間で、大泉小学校の3年生が牧場を訪れる



ことになった。牧場が区の体験ウォークラリーなどに協力していたこともあり、牧場に興味をもっている子どもが学校で紹介したことが、担任の耳に入ったのがきっかけであった。また、社会の街探検のコースである牧場に、子どもが「また行きたい」と強く求めたこともきっかけであるといえる。

大泉小学校の荒井淑子・横山弘美両教諭は、子どもの意欲を小泉氏に伝えながら、牛にしても、酪農家の仕事にしても、本物を見せたいという意志を伝えたところ、「子ども達の役に立つのなら」と応じた経緯がある。

牧場側は、仕事見学会を行うために、牛舎のまわりの草を刈り、外から見学しやすいようにしたり、足場を整えたりした。

平成14年度は、横山教諭が再び3年生を担当することになり、さらに3年生の総合学習である「牧場たんけん」が発展することができた。牧場側も、見学者のためのトイレを設置することになった。子どもの目線に立って、「人を受け入れること」に対する認識をかえていった。

そして、酪農教育ファームの認証制度を受け、牧場の体験受け入れの環境を整えることができた。

この年、大泉小の卒業生である勝さんも、大泉小学校の学習に協力するようになった。

BSEの問題が出て、児童が自ら「小泉牧場の牛が食べているえさは安全」と宣伝したり、牛乳アレルギーの子がいても、保護者が手袋を用意して搾乳体験に参加させたりした。命や食、また職業としての牧場の魅力にひきこまれていったといえる。



(3) 活動の成果

1) 子どもの変容にみる学校側の成果

小泉さんとの交流や、畜産体験を通じて子どもたちはたくさんのことを学んでいった。小泉牧場を「自分たちの町の牧場」と思い、地域に愛着をもつようになったのである。保護者も「今まで何度も前を通ることはあったけど、こんなに牛がいることも、小泉さんががんばっていることも知らなかった」と話すように、子どもとともに牧場に対する認識をかえ、この地に牧場があることはすごいことと思うようになった。そして、「牧場を続けてほしい」と応援するようになった。

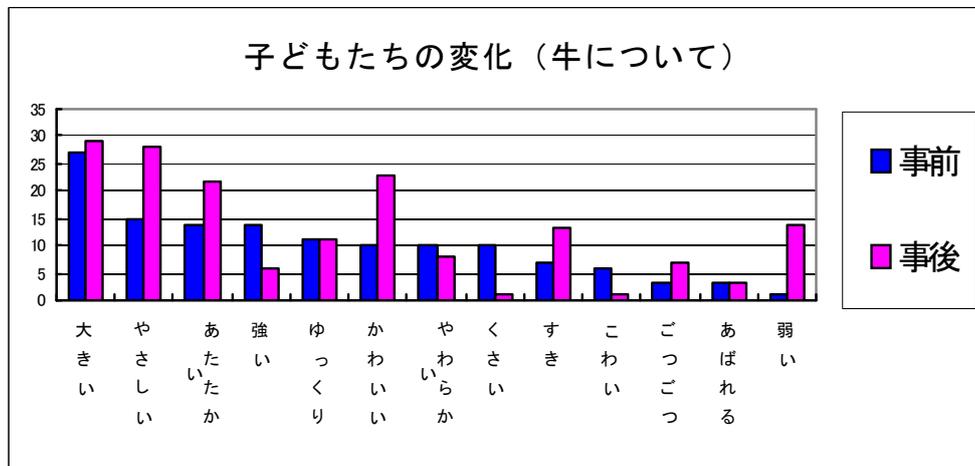
畜産体験を通して育まれる子どもたちの変容は具体的に次の4つがあげられる。

① 牛とふれあう中で大型動物ならではの特性を知る

はじめは、牛をこわがる子どもも多かったが、牛にふれ、乳搾りやブラッシングをすることで、だんだんと牛との距離が縮まった。そして、牛の特性や一頭一頭に個性があることを理解するようになった。はじめはこわいと思っていた牛が、実は逆に人をこわがる性質をもっていることも知った。

牛とふれあっているときの子どもは、ふしぎとおだやかな表情をして、癒しの効果があるようだった。

「牛のイメージに合う言葉」学習前と後の変化をみる



子どものもつ「牛のイメージ」について、学習前と後で、変化を見てみた。牛について思うイメージの言葉を選んだところ、学習後は、牛に対して、「こわい」「強い」イメージをもっていた子どもが減って、「やさしい」「かわいい」「弱い」が13人ずつふえていて、牛に対してなれてきたこと、牛の特性がわかってきたことが分かる。また、「くさい」が10人から1人に減ったことも大きな変化である。

② 酪農家へのあこがれを抱く

額に汗し、大きな動物を見事に扱い、仕事に向き合う酪農家の姿にふれることで、プロのすごさを感じることができた。コーヒー粕をまいて臭気対策を行っている牧場だが、それでも、はじめて牧場にきたときは、「くさい」と鼻をつまむ子もいた。しかし活動の中で、牧場の魅力を感じていき、そのような言葉は出なくなった。

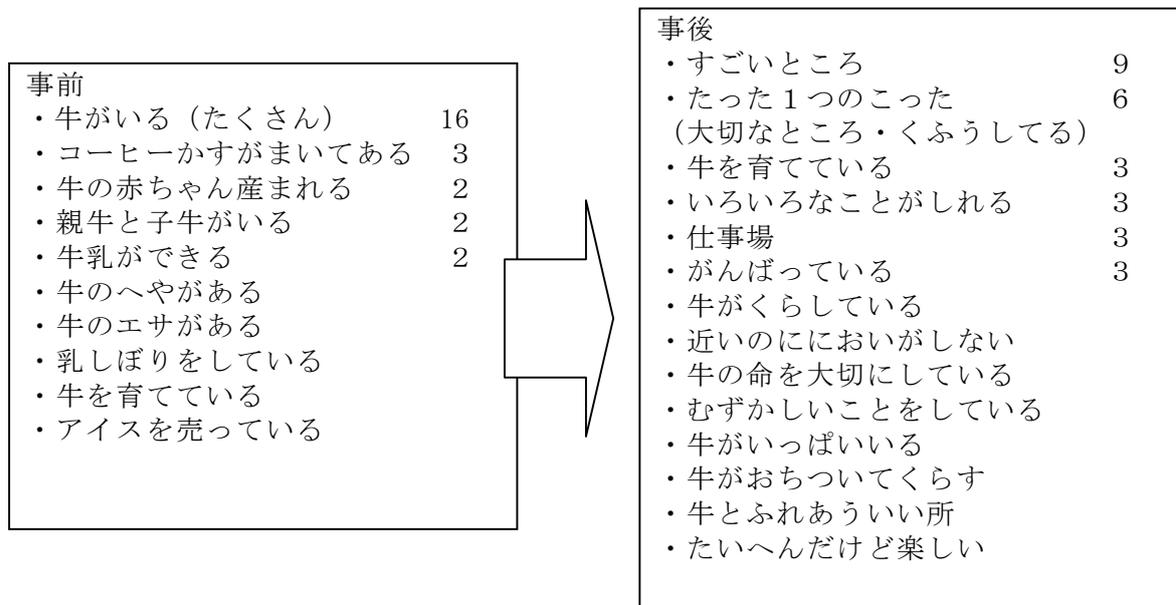


牛をうまく扱い、額に汗して力強く働く姿を見て、また、いろいろな工夫をして牧場を営む小泉さんの姿に、子どもは「プロってすごい」と肌で感じとっていく。働く姿を見ることの少ない子どもたちにとって、貴重な機会である。「小泉さんカッコいい！」と、小泉さんはヒーローになっていった。特に勝さんは、大泉小の卒業生であることから身近な存在になった。

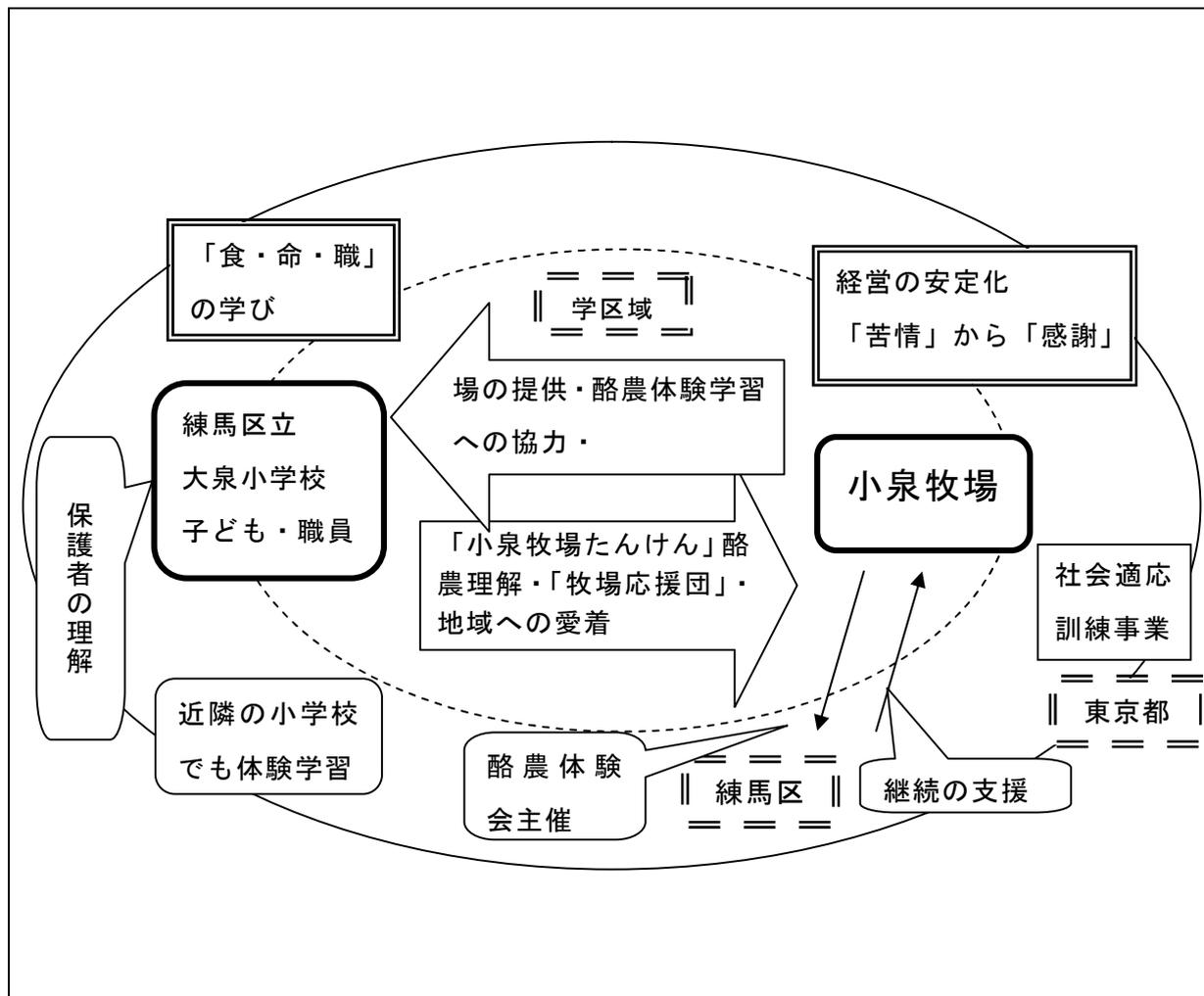


○「牧場のイメージ」についてのアンケート

学習前は、牧場は、「牛がいる」という漠然としたイメージであったが、学習した事後は、「牧場はすごいところだ」と感心し、具体的なイメージをもてるようになったことがわかる。23区内唯一残った牧場として、地域の誇りと思っていることが分かる。



「牧場を第二の教室として」「地域が一体となった取り組み」の仕組み図



③ 「食」と「いのち」の結びつきを知ることができる。

子牛の誕生を担当がとったビデオで見て、子どもたちは、歓声をあげていた。実際に何人かの子どもは、出産に立ち会うこともできた。生まれてすぐに立ち上がろうとする、けなげな子牛の姿に感動している子どもたちであった。しかし命について学べるのは誕生からだけではない。3年生で「小泉牧場たんけん」をした子どもが、6年生になって卒業アルバムに載せる作文に牧場のことを書いた。



「うまれた子牛が、私と同じ誕生日でした。その子牛はオスでした。大きくなるところが見たかったです。でも、小泉さんは、『この子牛は肉牛だから、大きくなったらお肉になるんだよ。』といいました。すごく驚きました。まだ1ヵ月もたっていないのに、大きくなったら殺されて、私たちに食べられてしまう・・・。

牧場は、子牛がうまれる「誕生」という場であり、私たちに食べられてしまう「死」という場所でもある事がわかりました」

これらの体験を通じ、子どもたちは、私たち人間は生き物のいのちをいただいていること、毎日飲む牛乳は、母牛が出産することで子牛のために出すミルクをいただいていることを学び、「いただきます」の意味をよく理解することができた。

また、子牛の世話をまかされた中学生は「ぼくは命をまかされた」という実感をもつことができた。

④食に対する関心をもつ

いつも飲んでる牛乳が、牛の出産によってできるものだということを知り、その温かさを感じ、生産者の思いを知る。学校給食の飲み残しが減ることにもつながった。

また、調べ学習をしたり、バター作りをしたりすることで、乳製品など、牛乳からできるさまざまな食品のことも知ることができた。「小泉牧場アイス」は、給食にも出され、子どもたちの楽しみの1つになっている。また、牧場でのアイスも人気商品である。



2) 牧場側の成果

①地域とのつながり

牧場には近隣の学校が4校、総合的な学習の時間に来るようになった。そんな中で地域の人とのつながりを、今まで以上にもてるようになった。

これは、牧場を存続していくための大きな力になった。牧場は、今まで環境問題を解決する一方で、牛のにおいや鳴き声などの苦情は、絶えなかったが、この学習が始まって、子どもの保護者や、地域の住民が、一緒に牧場にきたり、また、変容していく子どもの姿を見たりして、徐々に苦情が減っていった。

逆に、保護者からは、励みになる言葉をかけてもらうことが増えた。このことによって、牧場経営を続けていくことの精神的ストレスが緩和され、気持ちに余裕をもって、仕事していくことができ、経営も安定してきた。

②行政とのつながり

今では、学校や、近隣の人々だけではなく、練馬区をはじめとする行政機関も関心をもつようになり、小泉牧場を応援してくれるようになった。

秋には、練馬区都市農業課が主催して、練馬区民の酪農体験会を開くまでになり、小泉牧場は行政機関にとっても重要な存在となった。

(4) 今後の課題

- ・牧場の住宅事情は、今後ますます難しくなっていくと考えられ、環境づくりへの配慮が厳しくなる。
- ・学校、地域、行政とのつながりを継続していくために、連携のとり方を確立していく必要がある。

3 当該事例の活動・成果の普及推進のポイント

(1) 普及にあたっての留意点

< 牧場と学校の連携 >

○ 打ち合わせを綿密に行うこと

- ・学校は、牧場のタイムスケジュールを知る必要がある。労働の場である牧場への負担をかけないようにする。また、牧場によって、さまざまな事情を抱えているので、話し合いをしっかりと行う。
- ・「どんな活動内容」を「どんな狙い」で行うかをしっかり牧場側に伝え、または、酪農家と教員の役割分担を明確にしてから、子どもを牧場に連れて行く。また、事前学習、事後学習をしっかりと行うことを打ち合わせる。体験のさせっぱなしにしないようにする。そのことで、学習が有意義なものになる。

○ 保護者の理解を求める。

- ・活動を公開にしたり、通信などで紹介をしたりして、子どもの反応などを紹介していく。そのことによって、話題も広がり、学習が発展する。

< 地域の理解 >

○ 行政機関との連携を密にし、理解や協力を仰ぐ。

- 不特定多数の人が来場する場合、受け入れる側は印象を悪くしないことが重要である。来場者のどんな質問にも丁寧に答える姿勢が地域理解へつながる。

(2) 実施体制図

